『社会経済史年報』の創刊

――『アナール』と二人の創始者――

竹岡敬温

はじめに

一九二九年一月、パリのアルマン・コラン出版社から、『社会経済史年報 *Annales d'Histoire économique et sociale*』と題された、表紙が青灰色の季刊誌第一号が出た。『アナール』の創刊である。一六〇ページの小さな雑誌であった。しかし、それは歴史家の仕事についての伝統的な考え方を覆そうとする企ての第一歩であった。表紙には、主宰者としてリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックの二人の歴史家の名が記されていた。

第一号の巻頭に掲げられた「読者へ」と題した短い論説[1]で、この新しい雑誌の主宰者はつぎのようなかれらの意図をあきらかにしていた。第一に、この雑誌は、当時発達しつつあったが、しかし、なお科学的に十分認知されてはいず、制度的にまだほとんど確立されてはいない一つの領域、社会経済史を優先させるということであり、第二に、社会諸科学の研究をたがいに分け隔てているあらゆる種類の境界を無視するよう提案するということであり、さらに、歴史の雑誌として、『アナール』は、歴史学内部の仕切り、とりわけ歴史家たちが閉じ込められていた年代的、時間的枠組みに反対し、現在と過去とのあいだのあらたな連接を強調するということであった。

こうして、社会経済史の研究の推進に貢献しようとするだけでなく、『アナール』は、歴史研究のなかに新しい精神を導入しようとしたのである。すなわち、『アナール』は「過去の史料に」「古くからの、鍛えられた、確かな方法を適用する」歴史家たちと、「現代の社会や経済の研究

に専念する」人びととのあいだの、また、古代の専門家、中世研究家、近代史家などの、歴史家たち自身のあいだの、連絡機関、交流の場になろうとした。なぜなら、経済史の研究を発展させ、一つの社会、その過去および未来のよりよい理解と「明日には歴史となるもろもろの事実の正しい理解」が可能となるのは、「正当な専門化をおこない、自分の庭を営々として耕しながらも、隣人の仕事を見習おうと努め」、専門諸分野間の高い壁、それらの「恐るべき分裂」に反対し、知的交流を促進することによってだからである。

このように既成史学の伝統的な慣行に反対して創刊された、この雑誌の二人の主宰者、リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックの書簡集が、最近、二種類、公刊された。そのひとつ[2]は、フェーヴルとブロックがアンリ・ピレンヌ――二人が新しい「社会経済史」の雑誌を創刊しようとする努力のなかでもっとも頼りにしたベルギーの歴史家――に、一九二〇年代初めから一九三五年にピレンヌが死亡するまで差し出した、八五通の手紙(フェーヴル　五一通、ブロック　三四通)である。他のひとつ[3]は、フェーヴルとブロックとのあいだの往復書簡で、一九二八年から一九四三年までフェーヴルとブロックの二人が交換した、約五三〇通の手紙が三巻に収めて公表される予定であり、そのうち一九二八年から一九三三年までを対象にした既刊第一巻は、それを読む者に、『アナール』の誕生と揺籃期から幼年期にかけてのその形成過程に立ち会わせてくれる。

本稿は、この二つの書簡集にもとづいて、『アナール』の創刊にいたるまで、二人の歴史家が、ヨーロッパ既成史学の伝統的な観念、思想、研究習慣に挑戦する雑誌の創刊という、かれらの野心的な計画をどのように着想し、発展させていったかをあきらかにすることを目的としている。

一、共通の知的経験

一九二九年、『社会経済史年報』が創刊されたとき、リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックは、すでにストラスブール大学で一〇年来、教鞭をとる身であった。新しい雑誌の創刊という冒険に乗り出そうと決意したとき、二人はすでに無名の歴史家ではなかった。ストラスブール大学でフェーヴルは一九一九年以来、近代史の教授であり、ブロックは一九一九年に同大学の助教授となり、ついで講座をもたない教授になったあと、一九二七年以来、中世史講座の正教授になっていた。『アナール』創刊時、二人は共に大学制度の周辺に生きる犠牲者ではなかった。

フェーヴルは一九二五年の『近代史評論*Revue d'Histoire*

moderne』復刊時から、その編集委員の一員であり、ブロックは『史学雑誌*Revue historique*』や雑誌『中世*Le Moyen Age*』の活動的な協力者であった。二人は共に『歴史・文学評論*Revue historique d'Histoire et de Littérature*』に規則的に書評を書き、アンリ・ベルの主宰する『歴史総合評論*Revue de Synthèse historique*』の長年にわたる忠実な協力者であった。フェーヴルは、すでに三冊の重要な著書を公けにしていた。かれの学位論文『フェリペ二世とフランシュ・コンテ』[4]は一九一一年に刊行され、一九二二年には『大地と人類の進化――歴史への地理学的序論――』[5]が公刊され、『アナール』創刊の前年、一九二八年には『ある運命、マルティン・ルター』[6]が公刊されていた。ブロックは、一九二〇年に『王と農奴、カペー朝史の一章』[7]によって学位を取得したあと、一九二四年には、かれの傑作の一つ『奇跡を行なう王』[8]を公けにし、ついで比較農村史の研究に乗り出し、その成果は一九三一年に刊行された『フランス農村史の基本性格』[9]として結実した。

第一次大戦後、ドイツからフランスに返還されたストラスブール大学の再生のために、二人が同大学のスタッフとして選ばれたとき、かれらはまだ若かったが、しかし、けっして新参の歴史家ではなかった。ブロックは三三歳であったが、フェーヴルは四一歳になっていた。

この二人の歴史家の青春時代に感化をあたえ、かれらの仕事と『アナール』の針路に影響をあたえた一連の知的、学問的潮流があった。それらは㈠ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学派、㈡デュルケム派社会学、㈢アンリ・ベルによって指導された『総合評論*Revue de Synthèse*』(一九〇〇年に『歴史総合評論』として創刊、一九三一年から『総合評論』と改称)の運動、の三つである。[10]二人の歴史家の青春期にあらわれた、これらの革新的な潮流が二人にもたらした最大のものは、なによりも、既成史学における史料の狭隘な定義に帰着する偏狭な歴史概念、与件として提示される歴史的事実への崇拝、政治的、伝記的事件の優位にとって代わるものであったが、二人がその研究の知的インスピレーションと理論的、方法的方向づけの不可欠な部分を汲みとったのは、歴史学の外からであったことに注意することが重要であろう。

㈠二〇世紀の初頭にはなばなしく活躍したポール・ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュとフランス地理学派[11]は、フェーヴルとブロックにきわめて大きい影響をあたえた。地理学はなによりも抽象をはみ出す現実的なものへの好みであり、それは灰色の、くすんだ教育の世界へ現実世界を侵入させた。地理学は、二人の歴史家の心に、科学的研究とは、具象と現在にしっかり根を下ろした活動であるという考えを

育てた。歴史学が味気ない政治的年代記に閉じ込もっていたのにたいして、地理学はさまざまな社会グループにその注意を向けようとした。地理学は社会の発展における経済の重要性、また、社会を物理的、生物的環境に結びつけているさまざまな絆をよく知っていた。当時、多くの点で、本物の歴史を書いていたのは、地理学であった。のちにフェーヴルは、そのことをつぎのように書いている。「実際には、ある程度まで、われわれのめざす歴史を生み出したのは、地理学であったといえよう。」[12] 地理学はフェーヴルとブロックに、時間と空間との関係だけでなく、自然環境のなかの人間諸集団の関係に基礎を置いた社会的現実に近づくための、知的マトリックスと有効な手続きをあたえたのであった。事実、地理学は二人の歴史家の教養の一部となり、かれらは、その著作や書評のなかで、歴史家であるとともに地理学者でもあった。

(二)フェーヴルとブロックの知的形成期に、革新を求めるこの二人の若い歴史家に、かれらが受け入れようとはしなかった歴史学の支配的形態に、異議を申し立てるための議論を提供したもの、そのひとつが――当時、歴史学ととりわけ葛藤的な関係にあった――デュルケム派社会学であった。デュルケムが一八九八年にかれが創刊した『社会学年報 *L'Année sociologique*』とその著作において口火を切った論争は、一九〇三年、フランソワ・シミアンが『歴史総合評論』に「歴史の方法と社会科学」と題する論文を発表したとき、明確なかたちをとった。この論文はシャルル・セニョボスが二年前に公刊した著書、『社会科学に適用された歴史の方法』にたいする反駁であった。シミアンはこの論文で、「歴史家種属の偶像」、政治的偶像、個人的偶像、編年的偶像を激しく批判した。シミアンは、歴史家たちに、デュルケムがいっていたことを繰り返して、一回性や個別性についての科学はなく、繰り返されるもの、規則的なものについてのみ科学があると主張した。そして、社会学の方法の優位を主張し、歴史学には従属的な役割――すなわち、時間的な厚みのなかで、科学的実験を可能にする材料を社会学に提供するという役割――を割り当てた。シミアンの批判を受け入れながらも、フェーヴルとブロックは、歴史学に提案された役割に甘んじることはできなかった。しかし、かれらは、歴史学の革新は、新しい社会諸科学が歴史学に向けるさまざまな挑戦に応じてこそ、はじめて可能であることを理解したのであった。

『社会学年報』に拠って活動を続けていたデュルケム派社会学者たちは、それまでになかった斬新な知的発言のスタイルを創始したのであり、この雑誌は、フェーヴルとブロックにとって、科学的研究の活動的組織のモデルとなっ

た。フェーヴルは、『アナール』の初期の号のひとつで、このモデルの抗しがたい魅力をつぎのように想起している。「二〇歳の頃、われわれは、感嘆と本能的な反抗のまじり合った感情でもって、『社会学年報』を読んだものであった。それは、われわれの注意をもっともつよく引きとめた知的革新のひとつであった。それは、デュルケムの協力者たちによってはっきりとした言葉で説明され、議論され、表明される理由にしたがって、巻号を追うごとに、修正され、しだいに穏かになっていく分類の枠組みの、たえざる手直しと再適合の努力ではなかったろうか。[13]」

(三)一九〇〇年に創刊された『歴史総合評論』(一九三一年から『総合評論』)もまた、『アナール』の創始者たちにとって決定的な推進力となった。『総合評論』の主宰者アンリ・ベルの野心は、過度の専門化と既成の専門区分を拒否することによって、歴史学を知識の集大成の地位にまで高め、人間諸科学の失われた一体性を組織し直すことであった。[14]そして、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学とデュルケム派社会学が、知的形成期のフェーヴルとブロックにとって、理論的、方法的インスピレーションの源泉となったのにたいして、『総合評論』は、二人が自分たちの歴史概念を試すことのできる実験室として役立った。フェーヴルとブロックは多数の地理学者や社会学者と個人的関係を結んでいたにもかかわらず、かれらの雑誌発行の計画に協力したことはなかった。それに反して、アンリ・ベルの多くの提案に二人は進んでかかわり合った。

フェーヴルの場合がとくにそうで、かれは早くからベルの親しい友人として、その雑誌に協力した。フェーヴルは、一九〇五年に、この雑誌の「フランスの地域」という欄に、フランシュ・コンテにかんする重要な論稿を執筆して以来、同誌の身近かな協力者となった。かれはとくに歴史地理や経済史にあてられた欄の責任者となり、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ地理学の発展を追い、ジャン・ジョレスのイニシャティヴによって実現した、フランス革命経済史料の刊行を紹介した。一九二九年まで、フェーヴルがその論文と書評の多くを発表したのは、『歴史総合評論』においてであった。こうして、この雑誌への寄稿をつうじて、フェーヴルは、地理学に加えて、言語学あるいは言語の歴史、心性史、宗教史にたいするかれの重要な関心を表明することができたのであった。さらに、フェーヴルは、ベルが監修した「人類の進化」叢書に協力し、一九二二年には『大地と人類の進化――歴史への地理学的序論――』を、一九四二年には『一六世紀における不信仰の問題、ラブレーの宗教』[15]を公刊した。ブロックもまた、ベルの努力に無関心でいることはなかった。かれがその初期の論文のひとつ、

「イル・ド・フランス」を発表したのも、また、フェーヴルと遭遇する以前に、その『フランシュ・コンテ』[16]の書評を執筆したのも、『歴史総合評論』においてであった。

フェーヴルとブロックが共に親近感をいだき、受け継ごうとした、これら三つの、たがいに競合的な、しかし、それぞれの野心においては多くの場合相容れない革新的計画は、二人の歴史家に同じように影響したわけではなかった。シミアンが歴史家の砦を攻撃したとき、フェーヴルはその大学教育をすでに終えていたのにたいして、ブロックはまだ大学にはいっていなかった。しかしながら、知的一致ないし対立を越えて、連帯的な人脈が二人を結びつけた。デュルケム派社会学者や地理学者の一部はフェーヴルの世代から生まれ、他はもっと若く、ブロックの世代に近かった。そして、かれらのうちの若干のもののあいだに、専門分野間の葛藤によっても損われない紐帯が織り上げられたのであった。フェーヴルとブロックが『アナール』の協力者の一部を集めたのは、これらの知的人脈からであった。『アナール』の編集委員としての地理学者アルベール・ドマンジョン、社会学者モーリス・アルヴァクスの存在は、こうしたつながりをいわば公認するものであったろう。

二、ストラスブール精神

リュシアン・フェーヴルは、マルク・ブロックとの最初の出会いの場面をつぎのように語っている。「われわれがストラスブールで初めて出会ったのは、たしか一九二〇年一〇月のことだとおもうが、出席者に魂の高揚と純粋な熱意の思い出を残すことになる、あの学部開設のための集会のひとつでだった。出席者は四〇名[17]、その大半は前日到着したばかりで、軍服を脱ぎ捨てて間もなかった……面識のない者が自己紹介しあった。われわれは進んで相手の前に歩み寄った。このようなことは、その後二度と経験しなかったといってよい。われわれ似た者同士、選ばれた者同士が、こうした友情と献身を固く誓いあったのである。[18]」

しかしながら、アンリ・ベルに宛てた一九一九年秋の日付の手紙のなかで、フェーヴルは、ブロックとの最初の接触をつぎのような言葉で想起している。「わたしはすでにマルク・ブロックに会いました。われわれはともに大変よく理解しあえるでしょう。[19]」この文面から判断すると、フェーヴルがブロックにはじめて出会ったのは、ストラスブール大学の学部開設の集会以前であったようにおもわれる。いずれにしても、最初の出会いから二人の間に友情が芽生

え、その後の協力をつうじて強まっていったのであろう。

ストラスブール大学の再開はフランス文化のアルザス奪還を意図するものであったが、そのためには大学組織の改革が必要であった。[20] ドイツの大学としてのストラスブール大学は一九一八年一二月七日に最終的に閉鎖され、多くの委員会が設けられて、大学制度の全体に及ぶ新しい基礎のうえに、組織の再編成が準備された。とくに専門分野を越えた教授間の協力が強調された。こうして、ストラスブール大学は特別予算に恵まれ、研究室が再編成され、若い教授で活気づき、革新に好都合な環境があたえられた。

フェーヴルはこの新しい知的環境を賞めたたえて、ベル宛ての手紙のなかで、つぎのように書いている。「われわれは想像しうるもっとも緊密に結ばれた、そして集団としてもっとも活動的な学部でありつづけるでしょう。やる気、全員一致の、若々しい、協力への願望、多くの個人的交流、打ちとけた、親密な交際、知的なパーティ……ここでみられる知的一体感ほど元気づけられるものはないでしょう。これほどの連帯、団結、交流の感情は他のどこにもみられないでしょう。」[21] このような特別な雰囲気は、とりわけ同僚の講義への出席、共同授業、学際的研究への大きな関心にあらわれていた。それはアンリ・ベルが「ストラスブール大学の総合精神」とよんだものであった。このように格別に恵まれた環境のなかで、フェーヴルとブロックの活動は始まった。かれらは、古代史家アンドレ・ピガニヨル、ウージェーヌ・カヴェニャックなどの同僚数人と協力して経済史センターの充実をはかった。[22]

このような知的熱狂のあらわれのひとつが「土曜会」であった。「土曜会」は一九二〇年一月に始められ、異なる専門分野の教授たち(哲学者、社会諸科学の専門家、ゲルマニスト、法学者、歴史家、それに自然科学者)を集め、出席者の一人ないし二人によって紹介された最近の出版物にかんする「自由なおしゃべり」を原則とした会であった。フェーヴルとブロックは、そのいくつかの会合を社会史の研究にあて、それをまじめくさって「社会史学会」とよんでいた。この会合に何度も招かれたアンリ・ピレンヌに、フェーヴルはつぎのように書いている。「それは妄想ではありません。ここストラスブールでは、われわれ文科系のすべての学科の教授たちは、専門が何であるかを問うことなく、毎土曜日、このように協力しあっているのです。」[23]

この活動的な知的世界は、物質的条件にも恵まれていた。ストラスブール大学には特別に豊かな予算があたえられ、また、とくに充実した図書館があった。文学部の研究室には予算がつき、図書室が備えられた。文学部は紀要を発行するだけでなく、学部自身の叢書をもち、ブロックの『奇

跡を行なう王』はその一冊として発行された。

これまで、『アナール』の創刊は、しばしば、再開されたストラスブール大学に生まれた、このような特別な精神に結びつけて語られてきた。けれども、実際には、ストラスブール大学の再興から雑誌の創刊にいたるまでの一〇年間に、再発足時の格別に恵まれた環境はしだいに悪化していったようである。大学予算にかんする約束は守られなかった。ストラスブール地域社会への大学の同化は多くの障害にぶつかり、かならずしもうまくいかなかった。大学内における自治論者の要求の拡大は、アルザス地方出身の教授と他所から来た教授とのあいだの距離を大きくした。こうした大学環境の悪化は、一九二〇年代半ば頃から、多数の教授たちがストラスブールを去るようになった事実にもあらわれている。一九二五年、文学部長クリスティアン・プフィステールは、この事態をつぎのような言葉で嘆いている。「堅固に創設されたこの学部は、いまや崩壊しようとしている。最良の部分が立ち去っていく。が、これを甘受しなければならない。われわれはソルボンヌの控え室となる栄誉をになうことになるのだから。[24]」

フェーヴルも、一九二三年に、ベルへの私信のなかで、ストラスブールにおけるかれの孤独を告白し、もはや失望の念を隠そうとはしなかった。「わたしはストラスブールにいて、どうにも居心地が悪いのです。ここでわたしの生涯を終えるなど、とうていがまんできません。ここではわたしは孤独です。知人は何人かいますが、しかし、すこしも友情を感じません。パリでなら、わたしにとっても、妻にとっても、状況はまったく違ったものになるでしょうに。要するに、ここでのすべてがわたしをいらだたせ、退屈させるのです。[25]」これ以後、かれの職業的関心はパリに向かった。かれは――奇妙なパラドックスだが――ソルボンヌにおける実証主義史学の泰斗、シャルル・セニョボスの後を継ごうと考え、一九二六年に立候補したが、パリのリセの教授に敗れた。それ以来、かれはパリで訪れるすべての機会を逃がすまいとした。『アナール』創刊の直前には、かれはコレージュ・ド・フランスに立候補を表明した。ブロックもまた同じく、ストラスブールに幻滅し、フェーヴル同様にパリに戻りたいと願った。

三　『アナール』の誕生まで

一九二八年初めに、リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックが『アナール』創刊の事業に乗り出したとき、それはかれらにとって最初の試みではなかった。第一次大戦終結直後、二人はドイツの『社会経済史四季報

Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte』休刊のあとを埋める定期刊行物の刊行を計画した。『社会経済史四季報』は一九〇三年に創刊され、アンリ・ピレンヌ(ヘント)、ジョルジュ・エスピナス(パリ)、ポール・ヴィノグラードフ(オクスフォード)らが名を連ねる国際的な委員会によって運営されていたが、一九一九年一一月に発行を停止していた。

第一次大戦後の歴史研究の崩壊に心を痛め、とりわけ経済史の研究の発展を願ったフェーヴルとブロックは、当時、国際的に著名な歴史家であったピレンヌにたいして、戦前、国際的な交流と討論の場となっていたドイツの経済史の雑誌をモデルにして、社会経済史の国際的な雑誌刊行の主宰者になってくれるよう申し出た。

一九二一年一二月、フェーヴルはピレンヌに「『経済史・経済社会学評論*Revue d'Histoire et de Sociologie économiques*』の組織についての覚書」を差し出している。この題名は最終的には『経済史国際評論*Revue internationale d'Histoire économique*』に変更されるが、このときの「覚書」に添えられた一九二一年一二月四日の手紙、そして一九二二年二月七日および三月一日の手紙[26]に、つぎのような雑誌の構想が語られている。「われわれは純然たる無味乾燥な博学の雑誌、大量の分類カードの作成者用に供される学術用語目録を望んでいるのではありません。われわれが望んでいるのは、情報に富んだ雑誌、読まれる雑誌、せまい意味の経済史の専門家にだけでなく、すべての歴史家に、もっと一般的にいえば、社会学者であれ、哲学者であれ、法学者であれ、あるいは経済学者であれ、知的活動にかかわりをもつすべての人びとに情報の分け前をもたらす雑誌なのです。」そして、雑誌が「役に立つ」ためには、批判的討論や方法にかんする議論に的をしぼり、「共通の学理」を引き出すことのできる方法論を掲載しなければならないとされ、また、とくに人物、制度、経済史の研究活動、批判的文献学などに関する実用的、技術的情報が重視されていた。

協力を打診された人びとのなかには、すでに、中世史のジョルジュ・エスピナス、近代史のアンリ・オゼール、経済学説史のシャルル・リスト、人文地理学のジュール・シヨンなど、未来の『アナール』の協力者のいくにんかが名を出していた。けれども、社会学のモーリス・アルヴァクスの名は言及されず、また、地理学のアルベール・ドマンジョンの名もなかった。

第一号の刊行は一九二三年一月に予定されていた。しかし、計画は国際協力と資金調達の二つの問題でつまずいた。フェーヴルは、雑誌の第一号を一九二三年にブリュッセルで開催される国際歴史学会で紹介したいと願っていたが、

しかし、かれが書記をつとめる委員会の設置を報告するだけで満足しなければならなかった。委員会にはオランダとイギリスの二人の経済史家、ニコラス・ポストゥムスとウィリアム・アシュレーが参加したが、この二人がまもなく委員を辞めたため、雑誌刊行の成功は危うくなり、結局、計画は流産した。

この挫折した最初の努力は、しかしながら、けっして無駄ではなかった。この経験によって、フェーヴルとブロックは、将来の『アナール』に到達するために必要な諸条件を寄せ集めることができたからである。こうして、将来の『アナール』の知的マトリックスとなるものが明確になり、このとき二人によってとられた人的接触は『アナール』にその最初の協力者のいくにんかを提供し、さらに、ピレンヌとのあいだに、『アナール』初期の歴史においてきわめて有用となる友好的な、知的交流の関係を確立することができたからである。

この最初の試みの主たる促進者はフェーヴルであったが、一九二八年にイニシャティヴをとったのは、ブロックであった。出版社探しにあたって、ブロックは最初アルマン・コラン社のことを考えなかった。紹介者を頼って、二人の歴史家は多くの出版社に出向いたが、結果は空しかった。財政的困難から、第一次大戦後、フランスの学術出版は後退していた。

これらのうちで、二つの出版社とのあいだで、具体的な交渉が始められた。フェリクス・アルカン社とアルマン・コラン社である。フェリクス・アルカン社は大学図書の出版と雑誌出版の長い経験をもち、とくに『史学雑誌』と『社会学年報』を発行していた。最初の働きかけを試みたのはブロックで、一九二八年一月のことであり、アルマン・コラン社と接触する以前であった。その後、交渉は六月まで、アルマン・コラン社と平行して続けられた。

フェリクス・アルカン社との交渉を失敗に終わらせたのは、たんに財政的問題、商業的採算への懸念ではなく、雑誌の構想自体の問題でもあった。アルカン社は、同社が長年発行してきた『ジュルナル・デ・ゼコノミスト *Journal des Economistes*』の主宰者の死亡によって、同誌の編集方針の見直しが必要となり、その付録のような恰好で、雑誌の発行を年一回にするように提案した。[27] このように、アルカン社が受け入れることのできる計画は、フェーヴルとブロックが提案した計画とはひじょうに違っていた。

ブロックは一九二八年六月一八日、交渉相手のウージェーヌ・シュネデールに手紙を書いて、かれの意向をあきらかにしている。「われわれがアルカン社と話し合えたのは、たいへん嬉しいことでした。けれども、われわれは、経済

史の雑誌の発行計画について、われわれが重要と考えるいくつかの点、とりわけ季刊にしたいということに、なによりも執着していました。しかし、貴社は、この方式を承諾できるとは考えられませんでした。したがって、われわれが最終的に他の出版社と契約を結んだとしても、どうか悪くおもわないでください。」[28] フェーヴルは、アルカン社の最終的な答を待たずに、それとなくアルマン・コラン社にも頼むことを提案していた。

アルマン・コラン社では、一九〇〇年に義父の後を継いで社長となっていたマクス・ルクレールが、その出版物を一般書に広げながらも、同社の学術出版社としての性格を守り続けていた。同社のとくに好みの領域のなかには経済と地理があり、とくに地理学にたいして同社が果たした役割は、社会学にたいするフェリクス・アルカン社の役割に匹敵した。すなわち、一八九一年以来『地理学年報 *Annales de Géographie*』の出版社であり、ついでフランス地理学派の主要な論文を発行してきたアルマン・コラン社は、一九一四年には、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュと「世界地理」叢書を企画し、その最初の数巻が一九二七年に刊行されたばかりであった。また、第一次大戦後には、水準の高い啓蒙書の出版を意図した「アルマン・コラン叢書」を刊行しはじめた。この叢書の一冊として、現在の『アナール』編集委員代表シャルル・モラゼが『経済史入門』[29] を執筆し、一九四三年に公刊された。

マクス・ルクレールとの折衝は、未来の『アナール』の編集委員に加わるよう打診されていた、『地理学年報』の主宰者アルベール・ドマンジョンの強い個人的支持をえることができた。ルクレールに計画を紹介し、フェーヴルとの最初の会見を準備したのは、かれであり、その会見は一九二八年三月一二日におこなわれた。ルクレールは計画につよく関心を引かれ、すぐさま物質的条件（印刷の体裁、秘書の給料、寄稿者への報酬、主宰者と編集委員への報酬等々）について検討が始まった。

物質的条件以外に、二つの困難があきらかとなった。ひとつは雑誌の名称の問題である。ブロックは『経済発展・社会経済史評論 *L'Evolution économique. Revue d'Histoire économique et sociale*』という名称を提案したが、ルクレールはこの表現は重過ぎ、雑誌にはふさわしくないと考えた。そして、『地理学年報』との類似によって、『経済年報 *Annales économiques*』という名称の選定に傾いた。[30] しかし、これを文法構造がすこしあいまいだとしたピレンヌが、『経済史年報 *Annales d'Histoire économique*』という名称を提案し、最終的には、これに「社会的」という形容詞をつけ加えて、『社会経済史年報』という名称が決まった。

これ以前に、一九二一年一二月四日付のピレンヌ宛て手紙のなかで、フェーヴルは、「社会経済史」という表現にためらいを感じるということを、つぎのように書いていた。「言葉に過度の重要性をあたえないまま、習慣的に、いいふるされた名称を使用し、〝経済〟と同時に〝社会〟という言葉を使いつづけなければならないでしょうか。」しかし、フェーヴルは、のちに、高等師範学校の一九四一年の始業にあたり、学生にたいしておこなった「歴史を生きる」と題した講演のなかで、『アナール』創刊時の「社会経済史」という名称に立ち戻って、つぎのように語ったのである。「『アナール』の表紙にこれらの伝統的な二語を印刷させたとき、マルク・ブロックとわたしは、とりわけ〝社会〟が、時代とともにさまざまな意味に使われたため、しまいにはほとんどなにも意味しなくなってしまった、あの形容詞の一つであることを知っていました。実は、それを承知のうえで〝社会〟を選んだのです……と申しますのは、こう考えることでわれわれは一致していたからです。つまり〝社会〟のようなあいまいな言葉は、垣根を取り払って、あらゆる意味でのその自由な批判とイニシャティヴの精神を近所の庭に自由かつ広範に、そして無遠慮に行き渡らせようとめざしている、われわれの雑誌の名称として役立つように、まさに歴史の神様の名指しの命令によって創造されたのだろう、と。[31]」

第二の困難はもっと重大であった。社会学者で、おまけにデュルケムの弟子であり、「たぶん社会主義者ではないか」とおもわれるモーリス・アルヴァクスが[32]編集委員に加わることに、マクス・ルクレールが異議を唱えたのである。かれの目には、社会学はまだ形成途上にあり、あまりにも若く、方法のあまりにも不確かな学問とうつった。[33]この厳しい判断は、おそらく、デュルケム派社会学者たち、ことに『社会学年報』の「社会形態論」の欄の責任者、アルヴァクスが手厳しく批判した人文地理学の学派の代弁者、アルマン・コラン社の編集政策と無関係ではなかったろう。しかし、フェーヴルはその異議をしりぞけた。

編集委員の一人として、ストラスブール大学の同僚モーリス・アルヴァクスを選んだ理由を説明して、フェーヴルは「われわれの世代のすべての人間に異論の余地ない明白な影響をあたえた、あのフランスのデュルケム学派」に敬意を表しつつ、アルヴァクスは「党派的人間あるいは教条主義者としてではなく、情報提供者、そして、ある程度、批評家としてふるまうはずである」と明言している。そして、デュルケム派社会学者のなかでアルヴァクスを選んだのは、「この好奇心に富んだ、そして歴史家との良好な関係を保つことに格別な気づかいをしている人物は、われわ

れがかれに要求する資料と情報を提供するという特別な仕事のなかに、あなたが危惧しているらしい〝世俗的な〟関心事にとらわれない精神をもちこむことでしょう」[34]とのべている。この議論は、マクス・ルクレールを説得するに十分であった。

編集委員会の構成は、アルマン・コラン社との交渉の最初から、ほとんど決まっていた。八人のメンバーのうち六人がすでに選ばれ、同意をあたえていた。『アナール』の刊行計画を最初にマクス・ルクレールに紹介した地理学者アルベール・ドマンジョン、社会学者モーリス・アルヴァクス、四人の歴史家ジョルジュ・エスピナス、アンリ・オゼール、アンドレ・ピガニヨル、そしてベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌである。ほかには、経済学者のシャルル・リストと政治学者のアンドレ・シーグフリードが意向を打診されていた。リストはまだ返事をしていなかったが、六月に承諾の返事がきた。しかし、シーグフリードは辞退した。

いったん辞退したシーグフリードを翻意させるために、ブロックがあらためてかれに働きかけた。シーグフリードは、ブロック宛ての手紙のなかで、「あなた方の計画はすばらしいものだとおもわれるし、わたしはその方針にまったく共鳴します」[35]とのべて、共感を示していたが、しかし、ひじょうに多忙であり、自分の仕事の時間を大事に守りたかったかれは、定期的に集まらなければならない編集委員会の一員になることを、進んで承諾することはできなかった。しかし、フェーヴルとブロックは、シーグフリードの共感を「本当に効果ある」ものにしたいと願った。

このときのシーグフリード宛ての手紙のなかで、ブロックは主宰者が編集委員に何を期待するかをあきらかにしている。「われわれは、あなたがこれらの会議に出席され、あなたの経験、人間や事物についてのあなたの知識で、雑誌を助けていただきたいのです。あなた御自身の専門に関係する論稿は、もちろん、あなたの検討にゆだねられるでしょう。このことを、いまさらくどくどお願いするのは無駄でしょう。すでに、あなたは、このようなかたちで協力することを約束してくださったのですから。」ブロックがこのように熱心にシーグフリードを説得しようとしたのは、かれが、過去の研究と現在の研究とのあいだに対話のないことが、人間諸科学のもっとも重大な欠点であると考えていたからであった。同じシーグフリード宛ての手紙のなかで、ブロックは、この点について、つぎのようにのべている。「過去にかんする研究と現在を対象とする研究との離反は、人間諸科学の、とりわけ経済学の、おそらくもっとも恐ろしい欠点の一つです。おまけに、それはフランスに

固有の悪徳です……われわれは、現在の研究と過去の研究という二つの種類の研究にとってともに有害な、この馬鹿げた隔壁を打ちこわしたいのです。二つの種類の研究のあいだの連絡の役割は、われわれの雑誌の存在理由の一つなのです。[36]」

遂に、ブロックの懇願とマクス・ルクレール自身の介入が、シーグフリードのためらいに打ち勝った。しかしながら、結局、シーグフリードの協力は象徴的なものにとどまった。ブロックとフェーヴルの繰り返しの懇請にも拘わらず、かれが『アナール』に論稿を発表することはなかった。

フランスには当時、『社会経済史評論 *Revue d'Histoire économique et sociale*』という既存の雑誌があった。この雑誌は、パリ大学とポワティエ大学の法学部の二人の教授を主宰者として、一九〇八年に『社会経済学史評論 *Revue d'Histoire des Doctrines économiques et sociales*』との名称で、ポール・ジュトネール出版社から創刊されたが、一九一三年からは『社会経済史評論』と改称し、あらたにリール大学法学部の二人の教授を主宰者に加えて、マルセル・リヴィエール出版社から刊行されていた。しかし、しばらく前から経営的困難におちいり、定期的な刊行ができなくなっていた。危機にあったこの雑誌をすこしでも活気づけようとして、雑誌の主宰者たちは、社会経済史の学会を創設することによって、雑誌に安定した制度的基盤をあたえようとしていた。『アナール』の創刊は、一方で、この雑誌の不安定な存在にとって脅威となるのではないかと心配され、他方で、マクス・ルクレールは、この雑誌の主宰者による学会創設の動きが、フェーヴルとブロックの計画を危うくするのではないかと動揺した。[37]

『アナール』の編集委員の一人に予定されていたシャルル・リストは、『社会経済史評論』の編集委員のメンバーでもあり、かれは二つの経済史の雑誌の成功の可能性に確信をもてず、それぞれがともに十分な数の読者をみつけられないのではないかと懸念した。そのため、二つの機関の合併が提案された。しかし、フェーヴルは、二つの雑誌の考え方の両立しがたいことを強調して、この解決策に激しく反対した。「協調ですって。夢のような空想にすぎません。まず物質的な理由からです。しかし、それを検討するのはわたしの役目ではありません。つぎに知的な理由からです。その理由はあまりに重大なので、絶対的な不可能と同じではないでしょうか。まったく正反対の願望、思想、感情に動かされた人間たちによって作られる、雑種の機関の精神や感覚とはいったい何でしょう。[38]」フェーヴルとブロックにとっては、『社会経済史評論』という既存誌の名称はまやかしであった。この雑誌は、実際には、まさしく

フェーヴルとブロックが『アナール』を創刊することによって反対しようとしていた、経済思想や経済政策、経済的決定の歴史の雑誌であった。『社会経済史評論』をめぐるこのエピソードは、一九二〇年代から三〇年代への交にようやく明瞭になった、歴史研究の二つの敵対する考え方、歴史学内部の知的対立を顕在化させるものであった。

一九二〇年代の初め、リュシアン・フェーヴルがいだいた野心的な計画は、研究と教育において当時まだ確立していなかった学問の国際的な連携をめざすものであった。この野心には、一つの先駆があった。ドイツの『社会経済史四季報』である。『経済史国際評論』の刊行によって、フェーヴルはドイツの雑誌の休刊のあと空いた空席を埋めようとした。一九二〇年代に経済史の研究は発展したが、その発展は国によってきわめて不均等であった。いくつかの雑誌が第一次大戦の終結とともに休刊し、そのうち、あるものは復刊した。『社会経済史四季報』の場合がそうであった。また、いくつかの新しい雑誌がイギリス、アメリカ、日本などで創刊された。マルク・ブロックがフェーヴルの挫折した最初の試みをふたたび取り上げたとき、かれは「フランスの、しかし国際的な精神の雑誌」という表現を使った。その雑誌は経済史の研究を重視し、歴史家だけでなく、専門の枠を越えて、すべての「善意の人びと」を集めようとして創刊されたのであった。

(1)〈A nos lecteurs〉, *Annales d'Histoire économique et sociale*, I, 1929, pp.1-2.

(2)Bryce and Mary Lyon, *The birth of Annales history:the letters of Lucien Febvre and Marc Bloch to Henri Pirenne*（*1921-1935*）, Bruxelles, Palais des Académies,1991.

(3)Bertrand Müller, *Marc Bloch, Lucien Febvre et les Annales d'Histoire économique et sociale, Correspondance*, I（*1928-1939*）, Paris, Arthème Fayard, 1994.

(4)Lucien Febvre, *Philippe Ⅱ et la Franche-Comté:la crise de 1567, ses origines et ses conséquences. Etude d'histoire politique, religieuse et sociale*, Paris, Champion, 1911. Réédition:Paris, Flammarion, 1970.この学位論文と同時期に書かれた「フランシュ・コンテ史」が、「フランス古地方」叢書の一冊として、一九一二年に発行された。Lucien Febvre, *Histoire de Franche-Comté*, Paris, Boivin, 1912, réédité en 1922.

(5)Lucien Febvre, *La terre et l'évolution humaine. Introduction géographique à l'histoire*, Paris, La Renaissance du livre, 1922, Paris, Albin Michel, 1949. Réédition: A.Michel, 1972. 飯塚浩二・田辺裕訳『大地と人類の進化』岩波文庫二巻。

(6)Lucien Febvre, *Un destin: Martin Luther*, Paris, Rieder 1928. Réédition: Paris, P.U.F., 1968.

(7)Marc Bloch, *Rois et serf: un chapitre de l'histoire capétienne*,

Paris, Champion, 1920.

(8) Marc Bloch, *Les rois thaumaturges. Etude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale, particulièrement en France et en Angleterre,* Strasbourg, Publication de la Faculté des Lettres de Strasbourg, Librairie Istra, 1924. Réédition: Paris, Armand Colin, 1961; Paris, Gallimard, 1983.

(9)Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, Paris, Société des Belles-Lettres, 1931. Réédition: Paris, Armand Colin, 1952. 河野健二・飯沼二郎・坂本慶一・服部春彦・吉田静一訳『フランス農村史の基本性格』創文社、一九五九年。

(10)Cf. André Burguière, Histoire d'une Histoire: la naissance des *Annales*, *Annales Economies Sociétés Civilisations*, XXXIV, no.6, nov.-déc. 1979, pp.1351-1352; B.Müller, *op.cit.*,I,pp. XIV-XVII; 竹岡敬温『「アナール」学派と社会史—「新しい歴史」へ向かって—』同文舘、一九九〇年、二八—三二ページ参照のこと。

(11)フランス地理学については、Cf. Vincent Berdoulay, *La formation de l'école française de géographie*（*1870-1914*）, Paris, Bibliothèque Nationale, 1981. また、Cf. André-Louis Sanguin, *Vidal de la Blache, 1845-1918. Un génie de la géographie*, Paris, Blin, 1993.

(12)Lucien Febvre, La géographie. Réflexion sur un cinquantenaire, *Annales E.S.C.*,VIII, 1953, p.374.

(13)Lucien Febvre, Histoire, économie et statistique, *Annales d'Histoire économique et sociale*,II, 1930, p.583.

(14)アンリ・ベルの知的全てについては、Cf. William R. Keylor, Henri Berr and the "Terrible Craving for Synthesis", in *Academy and Community: the Foundation of the French Historical Profession*, Cambridge, Cambridge University Press, 1975; Martin Siegel, Henri Berr et la *Revue de Synthèse historique,* in *Au berceau des Annales*, sous la direction de Charles-Olivier Carbonell et Georges Livet, Toulouse, 1983, pp.205-218; Giuliana Gemelli, Communauté intellectuel et stratégie institutionnelles: Henri Berr et la fondation du Centre international de synthèse, *Revue de Synthèse*, avril-juin 1987, pp.225-259.

(15)Lucien Febvre, *Le problème de l'incroyance au XVIe siècle. La religion de Rablais*, Paris, Albin Michel, 1942, réédité en 1968.

(16)Lucien Febvre, *Les régions de France: la Franche-Comté*, Paris, Cerf, 1905.

(17)学部開設のメンバーのなかには地理学者のアンリ・ボリーグ、心理学者のシャルル・ブロンデル、社会学者のモーリス・アルヴァクス、宗教社会学の創始者ガブリエル・ル・ブラ、そして古代史のアンドレ・ピガニヨル、中世史のエドモン・ベランヌ、現代史のジョルジュ・バリゼ、ついで、のちに加わることになるフランス革命史のジョルジュ・ルフェーヴルなどの、歴史家のグループがいた。

(18)Lucien Febvre, Marc Bloch et Strasbourg. Souvenirs d'une grande histoire, *Mémorial des années 1939-1945*, Strasbourg, Publication de la Faculté des Lettres de Strasbourg, 1947, p.171; Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire*, Paris, Armand Colin, 1953,

p.391.長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』平凡社、一九九五年、一三一―一三二ページ。

(19)Institut Mémoires de l'édition contemporaine(IMEC)の Fonds Henri Berr に保管された手紙。Cit. par B. Müller, *op.cit.*, p.XIX.

(20)ストラスブール大学については、Cf. John E. Craig, *Scholarship and Nation Building. The University of Strasbourg and Alsatian Society, 1870-1939*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1984.

(21)一九二〇年復活祭前の、リュシアン・フェーヴルのアンリ・ベル宛て手紙。Fonds Henri Berr. Cit.par B.Müller, *op.cit.*,p.XIX.

(22)一九二一年四月二六日付、リュシアン・フェーヴルのアンリ・ピレンヌ宛て手紙参照。B.and M.Lyon, *op.cit.*,p.3.

(23)一九二一年一二月一二日付、リュシアン・フェーヴルのアンリ・ピレンヌ宛て手紙。B.and Lyon,*ibid.*, p.25.

(24)Cit. par B.Müller, *op.cit.*, p. XXI.

(25)一九二三年秋の、リュシアン・フェーヴルのアンリ・ベル宛て手紙。Fonds Henri Berr. Cit. par B.Müller, *ibid.*,p.XXI.

(26)B.and M.Lyon, *op.cit.*, pp.7-32に公表。

(27)一九二八年三月二四日付、ウージェーヌ・シュネデールからマルク・ブロックへの手紙。B.Müller, *op.cit.*,p.485.

(28) 一九二八年六月一八日付、マルク・ブロックからウージェーヌ・シュネデールへの手紙。B.Müller, *ibid.*,p.486.

(29)Charles Morazé, *Introduction à l'histoire économique*, Paris, Armand Colin, 1943; édition revue et corrigée, 1948, 1952. 湯村武人・竹岡敬温訳『経済史入門』創元社、一九六一年。

(30)一九二八年三月一六日付、マクス・ルクレールからリュシアン・フェーヴルへの手紙。B.Müller, *op.cit.*, pp.489-490.

(31)L.Febvre, *Combats pour l'histoire*, pp.19-20.長谷川輝夫訳、四〇―四一ページ。

(32)一九〇五年以来、『社会学年報』の協力者であったモーリス・アルヴァクスは、一九〇六年に社会党(労働者インターナショナル・フランス支部。SFIO)に入党していた。

(33)おそらく一九二八年三月一三日に差し出されたリュシアン・フェーヴルのマルク・ブロック宛て手紙。B.Müller, *op.cit.*, pp.9-11.また、一九二八年三月六日付、マクス・ルクレールからリュシアン・フェーヴルへの手紙。B.Müller, *ibid.*,pp.489-490.

(34)Cit., par B.Müller, *ibid.*,pp.XXVII-XXVIII.

(35)一九二八年二月三日付、アンドレ・シーグフリードのマルク・ブロック宛て手紙。Fonds Paul Leuillot, Bibliothèque municipale de Colmar. Cit.,par B.Müller, *ibid.*,p.XXVIII.

(36)一九二八年二月七日付、マルク・ブロックのアンドレ・シーグフリード宛て手紙。Fonds Paul Leuillot, Bibliothèque municipale de Colmar, cit., par B. Müller, *ibid.*,p.XXVIII

(37)一九二八年二月二八日付、マクス・ルクレールからリュシアン・フェーヴルへの手紙。B.Müller, *ibid.*,pp.490-491.

(38) 一九二八年六月一日付、リュシアン・フェーヴルからマクス・ルクレールへの手紙。B.Müller, *ibid.*, pp.XIX, 28.

(たけおか ゆきはる 大阪学院大学教授・大阪大学名誉教授)